

静岡県富士山世界遺産センターにおける展示について

株式会社 丹青社 デザインセンター 高橋久弥

一、はじめに

富士山は、平成二五年に「信仰の対象と芸術の源泉」の名称のもと、世界文化遺産に登録された。

静岡県富士山世界遺産センターは、その普遍的価値を保護し、将来の世代へ伝えていく拠点施設として、富士宮市の富士山本宮浅間大社近くに整備することとなり、平成二三年度の基本構想から約六年の検討・設計・製作を経て、平成二九年一月二三日に開館した。静岡県と山梨県をまたぐ位置にある富士山の世界遺産センターとしては、平成二八年六月に開館した山梨県立富士山世界遺産センターに次いでの開館となる。

その他国内では、知床、石見、紀伊山地、白神山地等に世界遺産

センターが整備されている。

世界遺産センターの展示の目的は、自然公園内のビクターセンターとは異なり、エリア内の生物や文化の紹介にとどまらず、その自然としての価値（自然遺産）もしくは文化的価値（文化遺産）を広く世界に発信していくことを目的としている。

今回、私たちは当センターの展示の企画・設計・製作を担当させていただいた。

二、実際の景観と、映像で見る富士山の景観の魅力

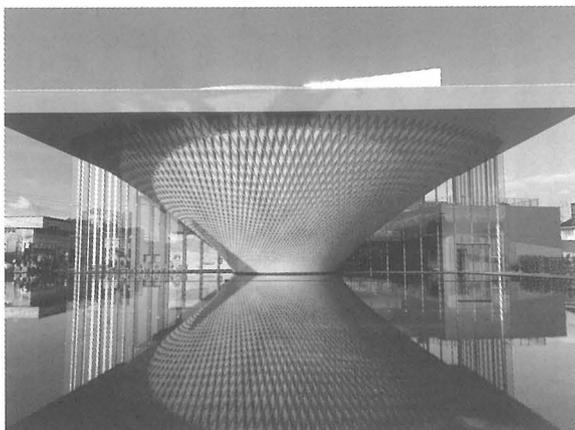
富士市のデータによると、富士山全体を見ることができるのは、一年間のうち約四割程度で、近くまで来ても富士山を見ることができないことが多い。

富士山の実物を見られない時に

も富士山の素晴らしい景観を見ることができ、来館した時には見られない別な季節の富士山の景観を楽しむことができる、これらの来館者のニーズに応えるのはやはり映像手法が有効である。センターは富士山の実景も活かしながらさまざまな富士山を見ることができきる工夫により計画された。

①水盤にうつる木格子の「富士山」
坂茂氏の設計による「逆さ富士」の建築は、手前の水盤に檜のメッシュに覆われた富士山として浮かび上がる。

②一九三mのスロープを上りながら「富士山」のさまざまな高さから見る景観
「逆さ富士」の内部は展示空間となっており、壁面にはタイムラプス撮影（同一アングルで長時間に及ぶコマ撮り画像を動画に編集する手法）による富士山の風景や、富士山から見た風景の映像が最大



八面マルチ映像によって投影されている。スロープを登山のように上がりながら、海から見た富士山、五合目から見た景観、森林限界、山頂といった標高による景観の違いを映像で体験することができる。

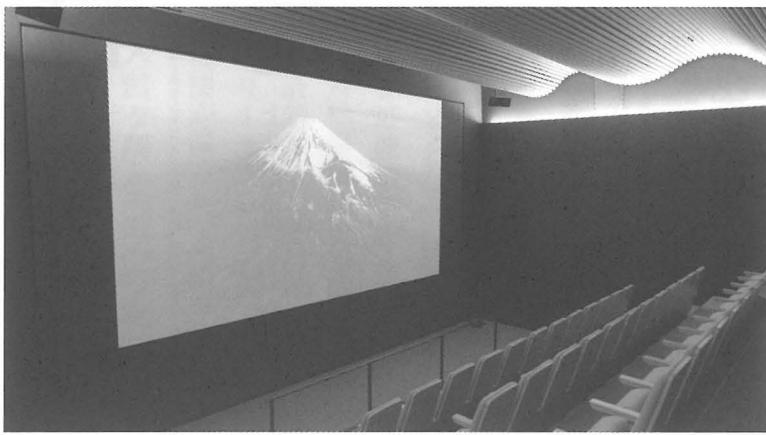
③ 建築によってトリミングされた実際の「富士山」

スロープを上りきると五階の展望ホールから実際の富士山が見える。坂茂氏によって「ピクチャーウインドウ」と名付けられた幅一〇m、高さ三mの開口はスライディングガラス扉によって全開することができる。



④ 4Kによる大型スクリーンで見る「富士山」

二階には二六五インチスクリーンによるシアターを設け、4Kの解像度の映像作品を上映している。番組は二本あり、「天の巻」と題された富士山の豊かな自然、美しい自然を紹介する番組と、「地の巻」と題された信仰の対象・芸術の源泉としての富士山の姿を実際に登拝する人々の姿とあわせて紹介する番組がある。



どちらの作品もさまざまな天候条件の中で、辛抱強く空撮、水中撮影も交えて新撮したもので、見たえのある作品に仕上がっている。

二、インバウンド対策としても有効な体感させる解説手法

前述したスロープのタイムラプス映像、シアターの4K映像のどちらもナレーション、テロップともに入れず、景観の映像のみで体感させる映像作品としている。

本施設は海外の来館者もターゲットにしているため、多国語対応が必須であるが、これらのメインの映像演出については、ユニバーサルデザインの究極の手法として「言語」を用いないこととした。

その他の展示グラフィック、情報検索映像については、日、英、中（簡体、繁体）韓の五カ国語表記とし、携帯端末による音声ガイドも五カ国語対応とすることによって、限定はあるものの、通常の展示施設よりは対応はしっかりとっている。

四、今後の課題（おわりに）

この世界遺産センターでの展示体験は、登山体験になぞった動線を展開することで、来館者は実際の富士山に行った気になってしまいかもれない。

しかしながら、本来の目的としては、富士山の文化的な意味をここで考え、実際の富士山に行ってもらうことである。

充実した景観を体験する演出が、リアルな行動につながるような仕掛けや工夫についても、考え続けていきたい。

高橋 久弥 ● たかはし ひさや
株式会社 丹青社 デザインセンター
リンシバルクリエイティブ・ディレクター
千葉大学工学部デザイン科非常勤講師 日本空間デザイン協会理事
一九八四年に丹青社入社以降、全国の博物館、美術館、博覧会やキッズミュージアム等、さまざまなコミュニケーション空間の展示デザインに携わる。
グッドデザイン賞、日本空間デザイン賞、日本サインデザイン賞、キッズデザイン賞等、多数受賞。